生徒たちが主体的に学級づくりに邁進 学級の安定化が学力向上をもたらした

子どもたちが自ら学級づくりに参画する、新たな学級経営システム「学級力向上プロジェクト」（開発者：早稲田大学教職大学院教授田中博之先生）。いじめがない、安心できる学級づくりに向けて、同プロジェクトを実践する学校も増えています。今回は、2年前から本格的に取り組み、学力アップなど、さまざまな成果を挙げている広島市立五日市南中学校の実践事例をご紹介します。

3年計画でプロジェクトを推進

藤川 要造校長先生

平成26年度から学級力向上プロジェクトを本格的に導入した広島市立五日市南中学校。前年度に赴任された藤川要造校長先生は、その決断の背景を、次のように語ります。

「当時は問題行動が多発し広島県『小・中学校生徒指導集中対策指定校』の指定を受け多くの対策に取り組む日々でした。こうした状態では、いくら生徒たちに力があっても、安心して勉強したり、部活動に取り組むことは難しい。頑張りたい生徒が頑張れる環境を整えるためにも、すべてのベースである『学級』の立て直しが重要と判断しました」。

同中学校では課題であった学力アップに向けて、その2年前から「誤答分析」をメインに据えながら、学級力向上プロジェクトにも取り組んできましたが、この年度から同プロジェクトにさらに力を傾注する方針に転換。まずは3年間をめどに腰を据えて取り組むことになりました。

学級力向上プロジェクトとは何か

藤川校長先生が着目した「学級力向上プロジェクト」とはいかなるものなのか。まずはその根幹となる「学級力」の概念から見ていきます。学級力とは「学び合う仲間としての学級をより良くするために、子どもたちが常に支え合って目標にチャレンジし、友だちとの豊かな対話を創造して、規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を創り出そうとする力」を指します。中学校では6領域、24項目から形成される概念です（図1参照）。

プロジェクトは、この学級力の水準がどの程度かを確認するために、クラス全員を対象にした「学級力アンケート」を実施するところから始まります。その後、その結果を図示した「学級力レーダーチャート」（図2参照）でクラス全員が共有・診断した上で、数値が低い領域・項目などについて、改善に向けたアイデアを話し合い（「スマイルタイム」）、具体的な改善行動に落とし込んでいきます（「スマイル・アクション」）。この一連の活動を、1年間のR・PDCAに沿って、意図的・計画的に実践していきます。

学校を挙げた推進体制の構築

神垣 幸一先生

五日市南中学校の取り組みの特徴は、学校を挙げて全学年・全クラスで実施する体制を整えたところにあります。そのけん引役を担ったのが研究推進委員長の神垣幸一先生です。

「心がけたのは、教師の個人差が生じないよう、教員任せにせずに、統一した方式で進めること。そのため、このプロジェクトを学校の教育課程に位置付け、どの担任であっても同じ水準で実践できるよう、研究推進委員会を中心にバックアップ体制を整えることに腐心しました」

プロジェクトを学校全体で進める際に、大きなハードルとなったのがスマイルタイムの進め方でした。教職経験が浅い、若手職員を中心に、どのように話し合い活動を行えばいいのかイメージできないという声が寄せられたのです。そこで、同中学校では田中博之先生による直接指導も含め、「スマイルタイム」の授業展開の仕方を学ぶ「授業研究会」などの研修会を複数開催。また、神垣先生自身も他県の実践校を訪ね、その取り組みを校内に広める役割を果たしたほか、プロジェクトの事前準備や、学級力レーダーチャートの分析などを学年で行う体制も整備しました。「当初は教員にとっても負担だったかもしれませんが、学級内が落ち着いてくれれば、教員も安心して授業が行えるなどメリットも大きい。次第に、職員室でも、教員同士で進行状況や具体的取り組みについて交流する姿が見られるようになってきました」

スマイルタイムでの話し合いの様子

クラスの雰囲気が明るいものに

初めのうちは、同プロジェクトを定着させることができるか、子どもたちが意欲的に参画してくれるか大いに不安もあったようですが、それは杞憂に終わったとのこと。生徒たちは自ら理想の学級づくりに熱心に取り組むようになりました。

神垣先生は「アンケート結果を生徒たちが自ら見て、自己評価につなげられるところが、『Q-U』や『アセス』などの教育手法とは異なる、学級力向上プロジェクトの魅力の一つ。『クラスの子たちは、こんなことを考えているんだ』ということが、視覚的によく把握できるし、『では、どうしたら課題を解決できるのか』について、自然と頭をめぐらすようになるのです」と話します。さらに藤川校長先生も「学級力向上プロジェクトを始めてから、クラスの雰囲気が明るくなってきましたね。地域の方からも生徒の様子がよくなってきたとお褒めの言葉をいただくようになりました。中には男女の協調性が足りないという課題解決のために、昼

図2）あるクラスの学級力レーダーチャート

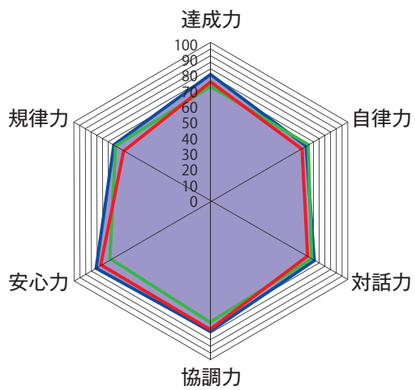


図1）中学生版学級力の構成

領域1	「達成力」（目標、改善、役割、団結）
領域2	「自律力」（主体性、時間、運営、けじめ）
領域3	「対話力」（聞く姿勢、つながり、積極性、合意力）
領域4	「協調力」（支え合い、修復、感謝、協力）
領域5	「安心力」（認め合い、尊重、仲間、平等）
領域6	「規律力」（学習、生活、整理、校外）

学級力向上プロジェクトの一環で、生徒たちははがき新聞を作成。小学校に向けて、はがき新聞で「学校紹介」を行うことも

休みにクラス全員でドッジボールを行うクラスも出てきました。これまでには考えられなかったことです」

また、スマイルタイムではクラスの「課題」ばかりに着目すると、生徒たちが自信をなくすこともあることから、併せて学級の「売り」（長所）をクラス内で共有することも徹底。「生徒たちのモチベーションアップにつなげることができました」（神垣先生）。

はがき新聞で考えが定着

同中学校ではスマイルタイムの後には、必ずはがき新聞を作成。自分の決意や感想を文字にすることで、より考えが定着します。

「1年生は全員、国語の時間ではがき新聞の書き方の指導を受けます。題字や見出し、レイアウト（記事は3つ）はもとより、誰に読ませたいのか、相手意識を明確にして書くことを重視させています」

書き上げたはがき新聞はレーダーチャートやスマイル・アクションの内容とともに、教室内に掲示。生徒の自覚を高めたり、クラス内の連帯意識を高めることにもつながりました。

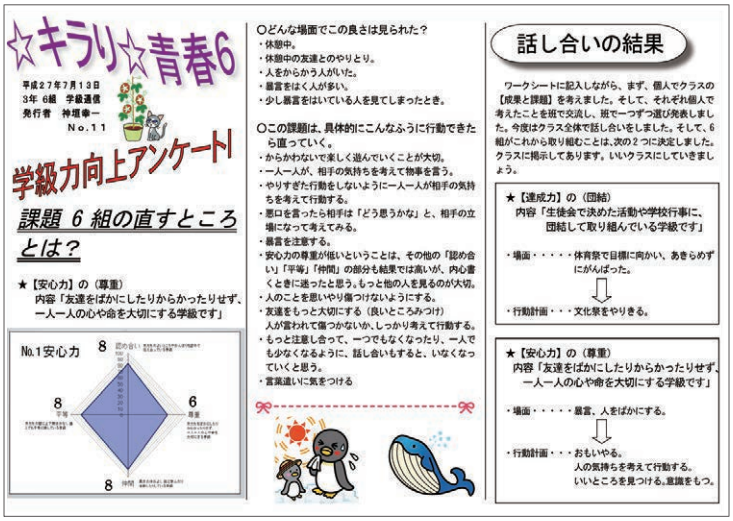
同中学校では学活の時間を活用し、アンケートの実施からはがき新聞の作成までの一連の取り組みに、3時間を充当。年間1、2年生はこれを3回、3年生は2回繰り返すほか、その模様を学級通信などで積極的に保護者にも発信するクラスもあります。

学級力を通した小中連携も視野に

学級力向上プロジェクトを実施して今年で3年目。その効果は驚くべきものがあります。その一つが学力の向上です。平成28年度全国学力・学習状況調査（3年生）の結果を見ると、国語A、国語B、数学A、数学Bの平均得点はいずれも全国・広島県平均を上回りました。学級力向上プロジェクトを本格導入した平成26年度にはおおむね全国平均と同程度でしたから、この2年ほどの間に、生徒たちはめきめきと力を付けていることが分かります。（図3参照）。

藤川校長先生は「以前は県内有数の進学校への合格者はわずかでしたが、昨年度は7名が合格。やはり、安心できる学級づくりが奏功したのだと思います。部活動でも多くの生徒が好成績を残しています」と近年の成果を紹介。神垣先生も「プロジェクトと並行して、協同学習を取り入れた授業づくり、良質なコミュニケーションを意識した予防的生徒指導などにも取り組んだ相乗効果が目に見える形で表れてきました。3年間継続してきてよかったというのが実感です」と振り返ります。

今後の抱負については、学級力を通した小中連携の推進が重要になると藤川校長先生。「現在でも、当校に通うことになる学区の2つの小学校に向けて、生徒たちがはがき新聞で『学校紹介』を行う取り組みをしていますが、非常に好評です。今後は小中連携をさらに活発にするためにも、小学校の段階で学級力向上プロジェクトが推進されるよう、来年度から具体的な取り組みを進めていきたいと考えています」

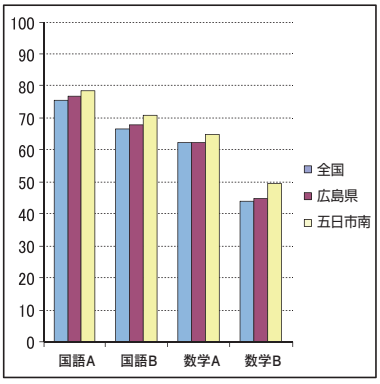


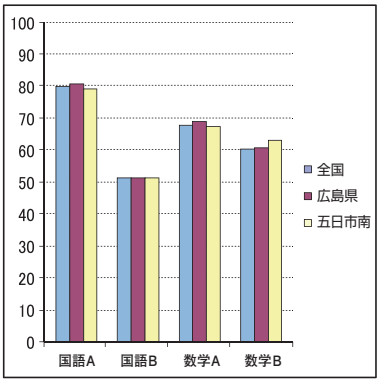
神垣先生は学級力向上プロジェクトの模様を学級通信などで広く発信

図3）全国学力・学習状況調査（3年生）

平成28年度

	全国	広島県	五日市南
国語A	75.6	76.6	78.3
国語B	66.5	67.9	70.8
数学A	62.2	62.1	64.8
数学B	44.1	44.8	49.7



平成26年度

	全国	広島県	五日市南
国語A	79.4	80.1	78.8
国語B	51.0	50.9	50.8
数学A	67.4	68.4	66.9
数学B	59.8	60.5	62.7